

## 鳥取県中部および東部方言における平板型アクセントの音調配列の分布と変化

著者	桑本 裕二
雑誌名	東北大学言語学論集
号	29
ページ	63-76
発行年	2021-03-19
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00133086">http://hdl.handle.net/10097/00133086</a>

# 鳥取県中部および東部方言における平板型アクセントの音調配列の分布と変化\*

桑本裕二

キーワード：鳥取県中部方言・鳥取県東部方言・平板型アクセント・一つ上がりアクセント・initial lowering

## 1. はじめに

鳥取県の方言区域は東部・中部・西部の3地域に分類される(森下 1999 など)。このうち西部方言は、島根県出雲地方、隠岐地方とともに「雲伯方言」という独自の方言区域としてまとめられるため(室山 1982:179)、県内の他の方言区域、すなわち中部方言、東部方言とは方言区分上は大きく隔たっている。音韻、特にアクセントに注目すると、金田一(1977)によると、鳥取県中部および東部方言はともに東京中輪式アクセントであって、おおまかには単一のアクセント区域としてまとめることが可能で、東京外輪式である鳥取県西部方言とは、一線を画している。

鳥取県中部および東部方言は、アクセント体系は東京方言と同じく、例えば、 $n$  モーラの名詞に対して、下降調が  $1 \sim n$  番目のどのモーラにも起こりうる  $n$  種の起伏型アクセントと、下降調のない平板型アクセントの、都合  $n+1$  種類のアクセント型を有する体系である。ただし、当該地域方言においては、原則的には東京方言アクセントに典型的な initial lowering がみられない。当該方言では、起伏型アクセントであれば、下降調が起こるモーラのみ高音調で、その前後はすべて低音調となる。平板型アクセントの場合は最終モーラのみか、後続する語のアクセント核が生じる直前まで低音調が続く(一つ上がりアクセント<sup>1)</sup> 森下 1999:15f.)。(1a) は、鳥取中部・東部方言の「からす(鳥)ガ」(頭高型)「たまご(卵)ガ」(中高型)「おとこ(男)ガ」(尾高型)「さかな(魚)ガ」(平板型)の音調配列、(1b) はそれに対する東京方言の語を対比したものである。なお、例示した語のアクセントは、鳥取県中部・東部方言、東京方言ともに同じ型である。

- |     |           |        |        |        |
|-----|-----------|--------|--------|--------|
| (1) | a. [か]らすガ | た[ま]ごガ | おと[こ]ガ | さかな[ガ] |
|     | b. [か]らすガ | た[ま]ごガ | お[とこ]ガ | さ[かなガ] |
- [:上昇調] : 下降調

鳥取県中部・東部方言と東京方言のアクセント型の音調配列の違いは、尾高型(4 モーラ以上の語であれば、+3, +4, ...型中高型も含む) および平板型アクセントの場合に確認できる。((1a, b) の網掛けの句)。平板型アクセントの場合、語が長くなったり(2)、下降調アクセント核のない語が後続する場合(3) は、当該地域方言では、最終モーラだけ高音調となるので、句全体が最終モーラ以外は全て低音調となり(2a, 3a)、同形の東京方言が第1モーラ以外全て高音調となるのと対称的である(2b, 3b)。

- (2) 「中村勘九郎」の鳥取中部・東部アクセント (a.) vs. 東京方言アクセント (b.)  
 a. なかむらんくろー  
 b. な[かむらんくろー
- (3) 「人がずーっと並んどる／並んでる」の鳥取中部・東部アクセント (a.) vs. 東京方言アクセント (b.)  
 a. ひとがずーっとならんど[る。  
 b. ひ[とがずーっとならんでる。

本稿は、分析対象を平板型アクセントに特化し、上に示した鳥取県中部・東部方言の平板型アクセントの音調配列について、主に、中部方言と東部方言での地域的な分布の多様性が認められるか、また、世代差による違いによって通時的变化の兆しを確認できるかを考察したものである。さらに、東京方言で initial lowering が起こらない場合があるとされる、第2モーラ特殊拍語（「と[ーきょー（東京）」に対する「[とーきょー」秋永 2014）の、当該方言での音調配列や、平板型アクセントの最終モーラ特殊拍語（原則的には「とっきゅ[ー（特急）」「にくま[ん（肉饅）」のように特殊拍の直前で上昇調が起こる）などを分析し、鳥取県中部・東部方言の平板型アクセントの音調配列の通時的变化、共時的変異の状況をまとめ、考察する。

## 2. 研究対象の地域について

森下 (1999:18) は、鳥取県の方言区画を、東部方言・中部方言・西部方言の3つに区分しているが（図1参照）、室山 (1982:179f.) は、雲伯方言に属する西部方言と、それ以東の地域が大きく2分されうるとしている。

本研究では、室山 (1982) によって同一区画にまとめられた鳥取県中部および東部方言における、アクセントの地域的多様性が認められるか、また、世代を追っての、伝統的なアクセント（本稿では特に音調配列）がどのように変化しているのか、またそのあり方について、両地域で何らかの差異が認められるか、を考察したものである。また、森下 (1999) のいう「一つ上がりアクセント」の実態をさらに追及するという意味合いもある。

調査地は、鳥取県中部方言に対しては、倉吉市、東伯郡湯梨浜町、同琴浦町、鳥取県東部方言に対しては、鳥取市、八頭郡八頭町である。図1で示した

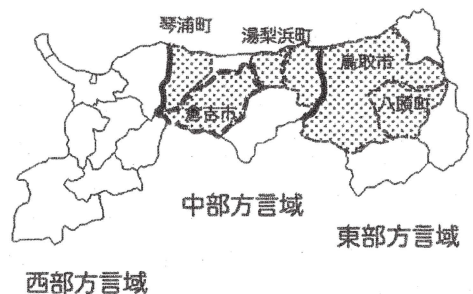


図1 鳥取県の方言区画と調査地の位置

とおり（調査地の市町は網掛けの部分）、これらの市町はそれぞれの同一方言区域内にあって<sup>2)</sup>、互いに隣接しており、相互の地域差は比較的過小なものと判断される。

## 3. 調査語について

### 3.0

調査語は平板語のみに限定した。その理由は以下のとおりである。

当該地域方言に典型的にみられる、一つ上がりアクセントは、音調配列に関しては、(1) で示したように、頭高型、+2 中高型の語では、東京アクセントの音調配列と区別されない。また、+3 型かそれより後方の中高型および尾高型アクセント語は東京方言には非常に少ないため(窪菌 2006:15、田中・窪菌 1999:61)、東京方言アクセントと対照するには平板型アクセントがもっとも適していると判断された。

調査に用いた語は、鳥取県中部・東部方言と東京方言で同じく平板型となる語を選択した。

本節では、調査に用いた平板語の音節構造について、3.1 軽音節で始まるもの、3.2 重音節で始まるもの、すなわち、第2モーラが特殊拍となっているもの(促音は除く)、3.3 重音節で終わるもの、すなわち、最終モーラが特殊拍となっているもの(促音は除く)、に分けて、注目すべき点について述べる。

### 3.1 軽音節で始まる平板語

東京方言では、頭高型アクセント以外の語で、第1モーラが低音調で、2モーラ目から高音調となり、以降降格が起きるまで高音調が続くという現象がみられる。これを *initial lowering* (または *initial dissimilation*, Labrune 2012:154, Vance 1987:80 など) という。軽音節で始まる語の場合は、原則的に *initial lowering* が起きるとされる。

- (4) a. 中高型: た[ま]ごガ
- b. 尾高型: お[とこ]ガ
- c. 平板型: さ[かな]ガ

これに対し、鳥取県中部・東部方言では、原則的には *initial lowering* が起こらず、降格アクセントのあるモーラのみ高音調でその前後はすべて低音調となる。これは「一つ上がりアクセント」と呼ばれているが(森下 1999:15f)、平板語の場合「一つ上がり」のモーラは句の最終モーラである。

(5) で示すように、平板語「さかな(魚)」について、語単独であるか、後続する場合は、後続語の起伏の有無、句や文全体の長さによって、「一つ上がり」の高音調の生じる位置が変わる。

- |        |                        |
|--------|------------------------|
| (5) 魚  | さか[な                   |
| 魚が     | さかな[ガ                  |
| 魚には    | さかな[ニ]ハ                |
| 魚から    | さかなカ[ラ                 |
| 魚を捕る   | さかなヲ[ト]ル               |
| 魚から離れる | さかなカラハナ[レ]ル            |
| 魚がおる   | さかなガオ[ル] <sup>3)</sup> |
| 魚がおる川  | さかなガオルカ[ワ              |

### 3.2 重音節で始まる平板語

東京方言では、重音節で始まる語、つまり、第2モーラが特殊拍の語の場合、*initial lowering* が起こらず、句の先頭から高音調となることがある((6a-c):服部 1980、秋永 2014:付9、Labrune



2012:154)。ただし、第2モーラが促音の場合は、initial lowering が起こらない形（先頭から高音調）は現れず（例えば、(6d)「\*[きっぷ]」）、高音調の始まる位置が促音の直後に後退する傾向があるとされる（(6d)では「きっ[ぷ]」）。

- |                     |    |                    |
|---------------------|----|--------------------|
| (6) a. 第2モーラが撥音：    | 餡蜜 | あ[んみつ]／[あんみつ]      |
| b. 第2モーラが長音の後部要素：   | 掃除 | そ[ーじ]／[そーじ]        |
| c. 第2モーラが二重母音の後部要素： | 毎月 | ま[いつき]／[まいつき]      |
| d. 第2モーラが促音：        | 切符 | き[っぷ]／きっ[ぷ]／*[きっぷ] |

この現象は、initial lowering が起こった場合に、特殊拍の直前に上昇調が起きるのを回避する手段であると考えられる<sup>4)</sup>。東京方言では文アクセント、文イントネーションなどを除くと、上昇調は initial lowering によらなければ生じることはないので、(6a-c)の右側の諸例のような音調配列は、すべて initial lowering が引き金になっているとすることができる。

一方、鳥取県中部・東部方言で、同じく重音節で始まる平板語は、一つ上がりアクセントの音調配列に従って、(7a)のように最終モーラのみ高音調になる場合と、(7b)のようにすべて高音調になる場合が併存する。

- (7) 「餡蜜」
- a. あんみ[っつ]
- b. [あんみつ]

(7b)は、東京方言における同じ環境の語、例えば(6a-c)の右側の「[あんみつ]」「[そーじ]」「[まいつき]」と同じ音調配列になっている。しかし、当該方言は、原則的に「一つ上がりアクセント」であるため、initial lowering が起こった形が基になって、その環境で、特殊拍の直前での上昇調を回避するという手続きによって形成された音頭配列とは考えられない。また、(7a)という当該方言特有の音調配列が併存し、なお、「あ[んみつ]」という、東京方言に見られる initial lowering が起きた形が併存しないのだとしたら、(7b)の形が当該方言で優勢なことは、東京方言とは関連しない語形であるとも考えられる。

この様な理由で、本稿では、重音節で始まる平板語の音調配列を調査し、その分布を確認することとした。なお、(6d)のような、第2モーラが促音であるものは調査語には含めない。

### 3.3 重音節で終わる平板語

当該方言の平板語は、単独であれば、語の最終モーラのみ高音調となる。重音節で終わる語に対し、この原則どおりの音調配列がなされた場合、最終モーラの特殊拍のみ高音調となり、その他のモーラ、すなわち先行するモーラは全て低音調となるので、結果として特殊拍の直前に上昇調が現れることになる。(8)は、鳥取県中部・東部方言で、最終モーラが特殊拍である語の典型的な音調配列の例である。

- |                     |    |         |
|---------------------|----|---------|
| (8) a. 最終モーラが撥音：    | 肉饅 | にくま[ん]  |
| b. 最終モーラが長音の後部要素：   | 特急 | とっきゅ[ー] |
| c. 最終モーラが二重母音の後部要素： | 誤解 | ごか[い]   |

- d. 最終モーラが促音： (存在しない)

この音調配列が存在しうること、そして、むしろこの環境でこの音調配列が優勢であるのは、東京方言とは違い、当該方言が特殊拍の直前での上昇調を回避せず、むしろ積極的に許容しているからだといえるのではないだろうか。また、当該方言では、initial lowering が句アクセントの基本にあるという東京方言とは関連しない、独自の音調配列がなされているとも考えられる。いずれにしても、最終モーラ特殊拍語の分析は、極めて示唆に富むものである。

#### 4. インフォーマントについて

本稿に関する方言調査は、2019年2月から9月にかけて、鳥取県倉吉市、東伯郡湯梨浜町、同琴浦町（以上鳥取県中部方言域）、鳥取市、八頭郡八頭町（以上鳥取県東部方言域）の住民総計23名に対して行った。インフォーマントの詳細は(9)のとおりである。

##### (9) インフォーマントの詳細

- a. 鳥取中部方言話者：11名（倉吉市、東伯郡湯梨浜町、東伯郡琴浦町）
  - 高年層（74～86歳）： 2名（男：1, 女：1）
  - 中年層（51～52歳）： 3名（男：2, 女：1）
  - 若年層（13～14歳）： 6名（男：1, 女：5）
- b. 鳥取東部方言話者：12名（鳥取市、八頭郡八頭町）
  - 高年層（65～80歳）： 4名（男：1, 女：3）
  - 中年層（37～41歳）： 3名（男：0, 女：3）
  - 若年層（19～29歳）： 5名（男：4, 女：1）

インフォーマントは全て当該地域の住民で、当人の父母の出身地も同地域か、鳥取県中部地区または東部地区の範囲を超えない近隣の地域の出生であることを確認している。また、他地域の居住経験は幼少期、または学生時代等の、概ね5年以内を限度と考え、全てのインフォーマントがこれらの条件を満たしていると判断した<sup>5)</sup>。

#### 5. 分析と考察

##### 5.0

本節では第3節で分類した調査語について、それぞれの語彙群の、鳥取県中部、東部方言の調査結果を示し、それに基づく考察を行う。

##### 5.1 軽音節で始まる平板語の分析

軽音節で始まる平板語の分析結果は、以下の通りである。

表1は中部方言に対する結果である。

表 1 鳥取県中部方言の軽音節で始まる平板語の音調配列 (「-が」が続く場合)

		高年層		中年層			若年層					
		CS1M <sup>a</sup>	CS2F	CM1M	CM2M	CM3F	CJ1F	CJ2M	CJ3F	CJ4F	CJ5F	CJ6F
1μ	か(蚊)が	L-H	L-H	L-H	L-H	L-H	L-H	L-H	L-H	L-H	L-H	L-H
2μ	たな(棚)が	LL-H	LL-H	LL-H	LL-H	LL-H	LL-H	LL-H	LL-H	LL-H	LL-H	LL-H
3μ	さかな(魚)が	LLL-H	LLL-H	LLL-H	LLL-H	LLL-H	LLL-H	LLL-H	LLL-H	LLL-H	LLL-H	LLL-H
4μ	はちみつ(蜂蜜)が	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H

L: 低音調 H: 高音調 -: 形態素境界

表 1 を見るかぎりでは、中部方言においては、一つ上がりアクセントの適用を受けた、最終モーラのみ高音調となる「...LLH」型の音調配列が優勢である。この音調配列にならないものは、表中、網掛けで強調しているが、これに該当するのは、CJ2M、CJ3F<sup>7)</sup> のデータのみであるが、これら以外の全てのものについては、単語の長さや、世代による差異は全くないので、中部方言では一つ上がりアクセントは厳格に保持されているとみなしてよい。

鳥取県東部方言の同種の語の調査結果は表 2 の通りである。

表 2 鳥取県東部方言の軽音節で始まる平板語の音調配列 (「-が」が続く場合)

		高年層				中年層			若年層				
		ES1F	ES2F	ES3M	ES4F	EM1F	EM2F	EM3F	EJ1M	EJ2F	EJ3M	EJ4M	EJ5M
1μ	か(蚊)が	L-H	L-H	L-H	L-H	L-H	L-H	L-H	L-H	L-H	L-H	L-H	L-H
2μ	たな(棚)が	LL-H	LL-H	LL-H	LL-H	LL-H	LL-H	LL-H	LL-H	LL-H	LL-H	LL-H	LL-H
3μ	さかな(魚)が	LLL-H	LLL-H	LLL-H	LLL-H	LLL-H	LLL-H	LLL-H	LLL-H	LLL-H	LLL-H	LLL-H	LLL-H
4μ	はちみつ(蜂蜜)が	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H	LLLL-H

東部方言では一つ上がりアクセントが適用されたものは高年層で優勢的であり、中年層まで見られるが、若年層ではほとんど皆無となる。若年層では、東京方言のような、initial lowering の起きているもの(網掛けで表示)がほぼ網羅的となっていて、一つ上がりアクセントは 1 名のみで(EJ1M)、しかも部分的な表出となる(はっきりと一つ上がりアクセントであるのは「棚が(LL-H)」のみで、「蚊が(L-H)」は音調配列の形状からは、一つ上がりアクセントか、initial lowering か、どちらの適用かは判断できない)。

高年層では、1 名(ES3M)を除くインフォーマントは、全て一つ上がりアクセントを実現しており、この音調配列の保存の程度は高いといえる。

一方、中年層では、インフォーマント 3 名中、一つ上がりアクセントを示したのは 1 名のみであり(EM3F)、4 モーラ語「蜂蜜(が)」の場合に、「LLLL-H」(一つ上がりアクセント)と「LHHH-H」(initial lowering)で揺れが生じている。同じように「蜂蜜(が)」で揺れを示している EM1F は、調査語の全体にわたっては initial lowering を示しており、もう 1 名(EM2F)は、完全に initial lowering を起こす形のみを表出している。つまり、東部方言においては、中年層で一つ上がりアクセントから initial lowering への移行が進行中であるといえそうである。

若年層では、インフォーマント5名中4名で、完全に initial lowering の起きる音調配列を示し、1名のみ一つ上がりアクセントが部分的に分布しているのみなので、ほぼ initial lowering 適応の音調配列への移行は終了したとみなせる。

「さかな (魚)」に対する、一つ上がりアクセントの場合 (CS2F)、initial lowering のある場合 (EM1F) のピッチ曲線を、それぞれ図2,3 に示す。

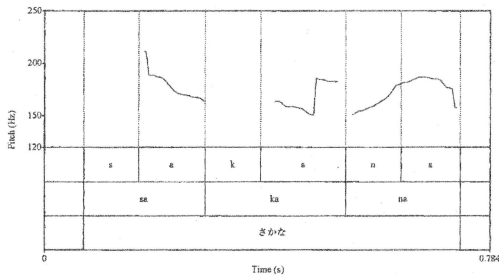


図2 一つ上がりアクセントの「さかな」のピッチ曲線

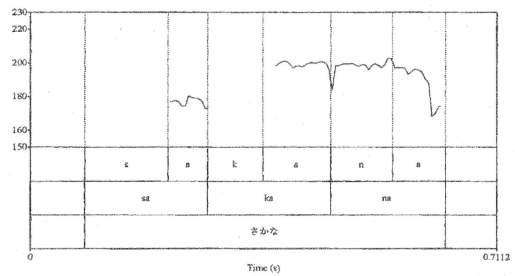


図3 initial lowering のある「さかな」のピッチ曲線

## 5.2 重音節で始まる平板語の分析

重音節で始まる平板語に対する調査結果は以下の通りである。なお、比較のために、東京方言話者に対する同様の調査結果 (インフォーマントは東京都練馬区出身、女性、21 歳) も並記する。

鳥取県中部方言話者についての調査結果は、表3の通りである。

表3 鳥取県中部方言の重音節で始まる平板語の音調配列

		高年層		中年層			若年層						東京
		CS1M	CS2F	CM1M	CM2M	CM3F	CJ1F	CJ2M	CJ3F	CJ4F	CJ5F	CJ6F	
#CVN	てん (点)	LH	LH	LH	LH	LH	LH	HH	HH	HH	LH	LH	HH
	にんき (人気)	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	HHH	LLH	LLH	LLH	LLH	HHH
	あんみつ (餛飩)	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	HHH	HHH	LLLH	LLLH	LLLH	HHH
#CV:	ばー (棒)	HH	HH	HH	HH	HH	HH	HH	LH	HH	LH	LH	HH
	そーじ (掃除)	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	-	HHH	HHH	LLH	HHH	HHH
	いーかた (言い方)	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
#Cai	はい (灰)	HH	HH	LH	HH	LH	LH	HH	HH	HH	LH	LH	HH
	たいや (タイヤ)	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
	まいつき (毎月)	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	LLH	LLH	HHH

-: 未調査

表3をみると、initial lowering が認められるものはほぼ皆無であり、全て高音調となる音調配列 (高起音調) が優勢である (高起音調を網掛けで示す)。ただし、第2モーラが撥音の場合には一つ上がりアクセントが認められるものが優勢で、第2モーラが長音・二重母音の第二要素である場合 (表3中、「ばー (棒)」以下の諸例) と対称的な分布を示す。また、世代差はほとんどみられなかった。その一方で、CJ5F, CJ6F のようにほぼ一つ上がりアクセントとなっているインフォーマントも観察されたが、これらについては、規範に合わせようとい



う意識がはたらき過ぎたせいとも考えられる。

3.2 で述べたように、東京方言における、先頭が重音節である語の高起音調は、initial lowering の起こりうる環境で特殊拍直前の上昇調を回避した結果と解釈されるものである。表3における高起音調は、表1で initial lowering がほぼ分布しないという結果や、表3で、initial lowering が起こった音調配列が全く見られないこと、とりわけ、同一インフォーマントにおける、高起音調と initial lowering の表出のゆれが全く見られないことから、東京方言の模倣、もしくはメディア等の影響による変化とは考えにくい。ただし、参考として例示した、表3右端の、東京方言話者の例は、当該調査語についてはすべて高起音調を示し、initial lowering の見られるものとのゆれは観察されないが、当該方言話者の高起音調が、このような東京方言の影響を直接受けているという可能性は否定できない<sup>8)</sup>。

鳥取県東部方言話者の調査結果は、表4の通りである。

表4 鳥取県東部方言の重音節で始まる平板語の音調配列

		高年層				中年層			若年層					東京
		ES1F	ES2F	ES3M	ES4F	EM1F	EM2F	EM3F	EJ1M	EJ2F	EJ3M	EJ4M	EJ5M	
#CV N	てん (点)	LH	HH	HH	LH	HH	HH	LH	HH	HH	HH	HH	HH	HH
	にんき (人気)	LLH	HHH	LHH	HHH	LLH	HHH	LLH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
	あんみつ (餡蜜)	LLH	HHH	LHH	LLH	HHH	HHH	LLH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
#CV: いーかた (言い方)	ぼー (棒)	LH	HH	HH	HH	LH	LH	HH	HH	HH	HH	HH	HH	HH
	そーじ (掃除)	LLH	LLH	LHH	LLH	LHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
	いーかた (言い方)	HHH	HHH	LHH	HHH	LHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	-	HHH
#Cal	はい (灰)	LH	HH	HH	LH	LH	HH	HH	HH	HH	HH	LH	HH	HH
	たいや (タイヤ)	LLH	LLH	LHH	LLH	LHH	HHH	LHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH
	まいつき (毎月)	LLH	HHH	LHH	LLH	HHH	HHH	LHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH	HHH

3つの年齢層のうち、若年層のみ統一的に高起音調が支配的であり、表2により、この年齢層が軽音節語で initial lowering を起こす場合が支配的であることと、東京方言話者のデータの分布との類似から、東京方言の影響を大きく受けていると考えられる。しかし、中年層以上に関しては、個人によるばらつきが大きく、当該地域、また、各年齢層に固有の特徴を見つけることは難しい。

表4を、中部方言の調査結果である表3と対照させると、まず注目できる点として、表4では、語頭の重音節が撥音を含むものと、それ以外の場合の分布の差がみられない点があげられる。語頭の重音節が撥音を含む語の音調配列について、高年層と中年層を対照させた場合に、通時的な変化の傾向というものを見いだしがたい。たとえば、ES3Mは東部方言高年層としては、表2では、例外的に initial lowering を起す強い傾向を示したが、表4をみる限りは東京方言話者とは全く異なる音調配列をみせている。また、ES3M以外の3名の高年層インフォーマントは、いずれも軽音節語で一つ上がりアクセントをほぼ網羅的に示したが、表4では、中部方言話者のようには高起音調が支配的とはいえず、一方で、高起音調が出ない場合は、ほとんどが一つ上がりアクセントになっている（つまり initial lowering を起こさない）とはいえ、ES2Fなどは、中部方言話者とは違い、第2モーラ撥音語の高起音調が優勢になっているなど全体として統一性がない。

中年層では、軽音節語ではほぼ網羅的に initial lowering を起こした EM1F, EM2F について



は、EM1F は3種の全ての語種で initial lowering を起こすものが支配的であるのに対し、EM2F は全ての語種で高起音調が支配的となり、東部方言の若年層に近い分布となっている。また、EM3F は表2と表4を通して中部方言話者と類似したデータを示しているが、「タイヤ」「毎月」などで他の箇所ではみられなかった initial lowering を起こしており、音調配列がゆれている。

以上を総括すると、鳥取県中部、東部方言の、重音節で始まる語の音調配列について、次のようにまとめることができる。

1. 全てのモーラが高音調となる高起音調が、両地域、高中若各年齢層において幅広く分布しているが、東部方言の若年層のものは東京方言の影響が考えられるのに対し、中部方言のものは特有の現象であると推測される。なぜかといえば、当該方言で、initial lowering を全く示さない話者が、高起音調を示しているからである。また、中部方言の高起音調は、全ての年齢層で支配的であり、音調配列に関して通時変化の痕跡は認められない。
2. 中部方言では第2モーラが撥音の語は高起音調が回避されるので、当該方言では撥音は低音調となる傾向にある。

当該方言話者のデータから、高起音調になる例(図4、CS1M)、一つ上がりアクセントが適用されている例(図5、ES1F)のピッチ曲線を示す。

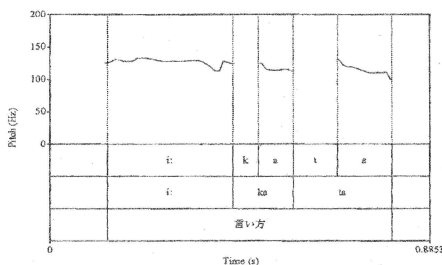


図4 「言い方」のHHHHピッチ曲線

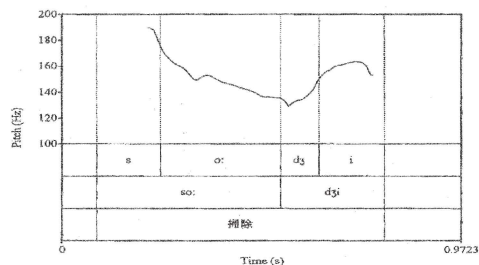


図5 「掃除」のLLHピッチ曲線

### 5.3 重音節で終わる平板語の分析

当該方言の平板語が一つ上がりアクセントで発話される場合、最終モーラのみが高音調になるので、「にくまん(肉饅)」「すもー(相撲)」「はなしあい(話し合い)」など、重音節で終わる語の場合は、語末の特殊拍の直前で上昇調が起こることになる。つまり、次の(10)のようになる。

- (10) 肉饅：           にくま[ん  
       相撲：           すも[ー  
       話し合い：       はなしあ[い

これらは中部方言、東部方言の両方言で実際に観察されている。図6(CM1M)、図7(CJ1F)、図8(CS2F)は筆者が採取したデータからのピッチ曲線を表している。

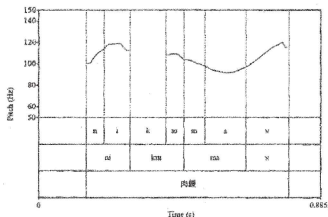


図6 「肉鰻」

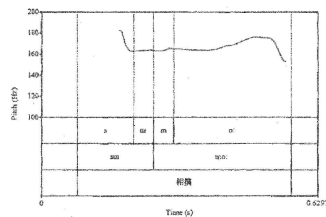


図7 「相撲」

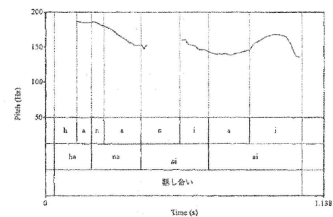


図8 「話し合い」

表1～表4で示した全インフォーマントのうち、initial lowering を起こして語を発話したインフォーマントは、全て、最終モーラ特殊拍語の語末付近は、常に高音調で発話し、特殊拍直前での上昇調は全くみられなかった。表5は、それ以外のインフォーマント、つまり、initial lowering を全く起こさなかったインフォーマントから抜粋し、重音節で終わる語の音調配列を表したものである。表示しているインフォーマントは、中部方言話者9名（若年層の2名を除く）、東部方言話者3名（高年層のみ）である。

表5 鳥取県中部・東部方言話者の重音節で終わる語の音調配列（一部抜粋）

		中部方言								東部方言			
		高年層		中年層			若年層			高年層			
		CS1M	CS2F	CM1M	CM2M	CM3F	CJ1F	CJ4F	CJ5F	CJ6F	ES1F	ES2F	ES4F
CVN-#	やかん（薬罐）	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH
	にくまん（肉鰻）	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH
CV-#	すもー（相撲）	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH
	とっきゅー（特急）	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH
	じみんとー（自民党）	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH
Cai-#	ごかい（誤解）	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH	LLH
	ななかい（7 階）	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH
	はなしあい（話し合い）	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH	LLLH

このように、一つ上がりアクセントをほぼ網羅的に保持している話者は、全体的に見て、重音節で終わる語であっても、同じような音調配列を行い、その結果として特殊拍の直前に上昇調を生じるのを許容する。表5の網掛け以外のデータがそれを示しているが、ほぼ全体的に分布しているのがわかる。服部（1980: 370）は、東京方言・京都方言については、「/CVV.../ または /CVN.../ という一音節内に昇り音調が現れるのをきらってこの部分が平ら音調をとったものとも説明できる（太字、下線は筆者）」と述べているが（注4）も参照）、このような重音節内の音調の上昇の回避の傾向が、もともと東京方言のアクセント体系の音調配列に内在したもので、そこから、諸方言へ広範に適用されるものだと仮定しても、表5の示す事実は、この傾向に反するものであり、服部（1980）の言及とは無関係に起きていることであると考えられる。

中部方言では、この傾向は非常に強いもので、CJ4Fの1例が高起音調であるという例外を除くと、特殊拍直前の上昇調は網羅的である。

一方、東部方言に、最終2モーラが高音調となつて、上昇調が1モーラ前にずれて生じるということが、散見される。(11)の2例がそれを表す。

- (11) 肉饅: にく[まん  
七階: なな[かい

それぞれのピッチ曲線は図9 (ES1F), 図10 (ES2F) のようになっている。

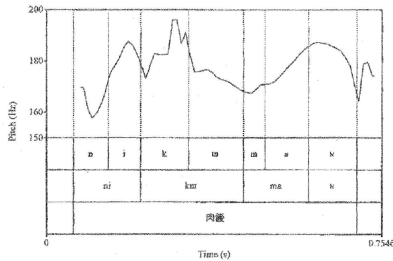


図9 「肉饅」 (LLHH) のピッチ曲線

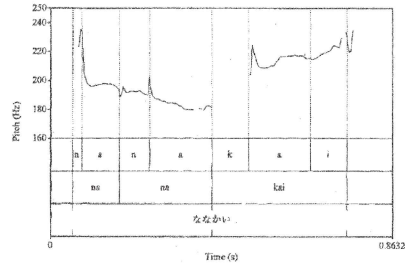


図10 「七階」 (LLHH) のピッチ曲線

これらの例からは、服部 (1980) の、重音節の音調は平らになるべし、とする主張が敷衍的に機能しているといっている。ただし、この例は、鳥取県東部方言に、しかも高年層に限られる。また、これらは *initial lowering* を全く起こさないインフォーマントによる例であることなどから、服部 (1980) の示した傾向に沿っているものの、それは東京方言の影響によるものでも、新たな通時変化の結果でもなく、当該方言本来の特有の現象であるといつてよい。

#### 5.4 全般的な分析結果の考察

5.1 節から 5.3 節までで示した、様々な音節構造の平板語の音調配列の分析結果からは、およそ次のことがいえる。

鳥取県中部・東部に共通してみられる一つ上がりアクセントの音調配列は、中部方言では、各年齢層で依然支配的であり、東部方言では、高年層で保持されているが、中年層以下ではほとんど観察されず、代わりに東京方言と同様の *initial lowering* のある、低起で2モーラ目から高音調に上昇する音調配列が支配的となる。中部方言では、調査した11名のインフォーマントのうち、若年層の1名を除いて *initial lowering* は観察されなかったが、当該地域ではこの種の音調配列は、現在のところ通時変化をほとんど受けず、極めて厳格に保持されているといえる。一方で、東部方言では、高年層で既に *initial lowering* が認められ、中年層以下では伝統的な音調配列はほぼ皆無となる。鳥取県東部地域では音調配列の激しい変化が既に起こっており、全年齢層を包括的にみるならば、その変化の移行は終了しかかっているといっている。

しかしながら、この変化について、東京方言の影響の結果であるとするには慎重になるべきである。東京方言では、先頭が重音節の語が、*initial lowering* の結果、特殊拍の直前で上昇調を起こすのを回避する手段として、高音調の連続で始まる音調配列を許容する。しかし、当該地域、特に中部地域では、軽音節で始まる語に *initial lowering* がほとんどみられないにもかかわらず、重音節で始まる語の高起音調が、支配的か、あるいは一つ上がりアクセントと共存していることから、当該地域に見られるこの種の音調配列が、*initial lowering* を回避した

結果とは考えられないからである。

また、重音節で始まる語の高音調連続が、特殊拍の直前での上昇調を回避した結果であるとする服部 (1980:370) の主張は、initial lowering のほとんどみられない当該方言において、「やか[ん]」「すも[ー]」「ごか[い]」のような音調配列が、許容されるどころか、この音節環境ではむしろ支配的であるということからして、おそらくは関連してはいない。ただし、東部方言で散発的に「にく[まん]」「なな[かい]」のような、服部 (1980) の主張に従っているとみられる例も存在し、これを東部方言の固有の特徴とすることができる。

## 6. おわりに

本稿における方言調査およびその分析を考察した結果をまとめると、以下のとおりとなる。

1. 鳥取県中部および東部方言において、両地域に共通してみられる一つ上がりアクセントは、平板型アクセントを調査した限りでは、両地域に幅広く観察されるものの、東部では中年層以下ではなくなりつつある。その一方で中部方言では中年層、若年層でもはっきりと保存されている。
2. 重音節で始まる語は、語頭、または句頭から高音調の連続となる場合が幅広く見られた。これは、東京方言において、initial lowering が起こった場合の、特殊拍の直前での上昇調を回避した結果として同様の音調配列になったのとは異なる理由によるものと考えられる。そのため、中部方言と東部方言高年層に多くみられる高起音調は、東京方言の影響を受けた、または受けつつある結果であるとはいえない。
3. 2.に関連して、当該方言では、特殊拍の直前での上昇調が回避されるべきであるという音調配列上の傾向は、服部 (1980) の主張に反してそれほど強くは働いていないようである。これは、重音節で終わる語が、「にくま[ん (肉饅) ]」「すも[ー (相撲) ]」のように、特殊拍の直前での上昇調がむしろ積極的に現れるという例からも実証できる。ただし、東部方言高年層のインフォーマントの中に、「にく[まん (肉饅) ]」「なな[かい (7階) ]」のような、特殊拍直前の上昇調を回避する例も、散発的ではあるが観察されたので、重音節内の上昇調回避の傾向は部分的には適用されているようである。また、この種の音調配列は中部方言には全くみられなかったもので、また、東部方言高年層のみに見られたので、当該方言固有の、かつ本来的な特徴としてあげられる。

これらの結論からは、① initial lowering は東京方言の決定的な特徴とみなしてもいいのか、② initial lowering と一つ上がりアクセントは対立する現象ととらえていいのか、など、一つ上がりアクセントを鳥取県中部、東部方言の際だった特徴として記述する際に問題となる議論は山積している。また、本稿では扱わなかったが、+3以降降格の中高型アクセント、尾高型アクセントの場合の調査、分析、また、当該方言の各アクセント型の出現頻度と本稿の結果との関連性をさぐることなど、残された課題は多くある。

## 注

- \* 本稿は、関西音韻論研究会 (PAIK) 2019年5月例会 (2019年5月25日、同志社大学) 同2019年10月例会 (2019年10月26日、神戸大学) および日本言語学会第159大会 (2019



年11月16日、名古屋学院大学)において行った口頭発表に基づき、加筆、修正を施したものである。特に、田中真一(神戸大学)、吉田優子(同志社大学)、佐々木冠(立命館大学)、植田尚樹(大阪大学)、脇坂美和子(神戸山手大学)、山岡翔(京都大学大学院)、窪菌晴夫(国立国語研究所)、福井玲(東京大学)、角道正佳(大阪大学名誉教授)の各氏には貴重な意見を賜り、その後の論の軌道修正または発展的な考察のために大変お世話になった、記して感謝申し上げる。また、本研究はJSPS 科研費 JP17K02687 の助成を受けたものである。

- 1) 山口 (1997:70) は「卓立調」と呼んでいる。
- 2) 鳥取市域の一部は、鳥取県中部方言域に含まれている。図1が示す、鳥取市域のうちの中  
部方言域に当たる地域は、旧気高郡の全域(旧気高町、旧青谷町、旧鹿野町、2004年11月  
鳥取市に編入(ウィキペディア「鳥取市」))に相当し、松森(2009)が旧青谷町周辺に局  
所的に観察される重起伏音調を報告しているように、その方言的特徴が、現在の鳥取市東  
部および南部域の方言とは、一線を画する地域でもある。また、松森(2009)は、同様の特  
徴を示す地域としては、東伯郡湯梨浜町内の数カ所も上げており、さらに、今石(1982:557)  
は、旧青谷町のほかに東伯郡湯梨浜町内(旧東郷町、旧羽合町、旧泊村)、同北栄町内(旧  
北条町)、森下(1999:16)は、それらに加え倉吉市でも同様の音調が見られるとしており、  
重起伏音調は、中部方言の一特徴とみなすことができ、その意味でも、現在の鳥取市域で  
ある旧気高郡域は、アクセント分布においては中部方言に属するものである。なお、当然  
のことながら、本稿でいう「鳥取市」の調査地に、この地域(現鳥取市の旧気高郡3町)  
は含まれていない。
- 3) 東部方言では「さかなガ[オ]ル」となる場合もある(筆者による調査より)。
- 4) 服部(1980:370)は同一音節内に昇り音調が現れるのをきらって平ら音調をとったものと  
も説明できる、としている。
- 5) 両親の出身地が当該方言地域外であることが判明した場合は、調査前、または調査後に対  
象データから外した。
- 6) インフォーマントの整理記号は、[方言別:C=中部方言、E=東部方言][年齢層:S=高年層、  
M=中年層、J=若年層][整理番号][性別:M=男性、F=女性]である。例えば「CS1M」のイン  
フォーマントは、「中部方言話者高年層(整理番号1)男性」であることを示す。
- 7) CJ3Fのみ東京方言のような initial lowering が起きた音調配列となっている。何度か録音し  
てこのとおりであることを確認したが、CJ3Fの家族は数年にわたって県外各地を転々と  
移動したと聞いており、当該地域の方言の特徴を出していない結果には、その影響は十分  
に考えられる。また、1モーラ語「蚊」の場合は、一つ上がりアクセントの場合と音調配  
列は同形になるが、他3例「棚(2モーラ)」「魚(3モーラ)」「蜂蜜(4モーラ)」と  
の整合性から、initial lowering が起こったものと判断している。
- 8) 秋永(2014:付9)は、東京方言(標準語)の高起音調は選択的なものと述べている。

二拍めから上がる語で、第二拍が引き音や撥音、二重母音副音の場  
合、無造作な発音の折や個人によって第一拍めから高くなること  
がある。(下線・太字は筆者)

表3にあげた東京方言話者のデータは、当該調査語については全て高起音調を示しており、  
このデータの限りでは、高起音調は東京方言ではもはや優勢の音調配列であるのかもしれ  
ない。したがって、表3に見られる高起音調は、もはや選択的な分布ではない、優勢的な



分布の東京方言の高起音調から何らかの影響を受けたという可能性も否定できない。しかしながら、例示した東京方言のデータは1名のインフォーマントによるものであって、それだけでは東京方言の音調配列の状況を網羅的かつ明確に示したことにはならないし、東京方言の音調配列の変化、変異に関しては、本論の主題ではないため、それに関連した議論は本稿からは割愛する。

#### 参考文献

- 秋永一枝 (2014)『新明解日本語アクセント辞典 第2版 CD付き』東京：三省堂。
- 今石元久 (1982)「台頭後起型アクセントの研究—鳥取県（因幡国）気高郡青谷町夏泊方言のばあい—」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学8—中国・四国地方の方言—』535-559, 東京：国書刊行会。
- 金田一春彦 (1977)「アクセントの分布と変遷」『岩波講座日本語 11 方言』129-180, 東京：岩波書店。
- 窪菌晴夫 (2006)『アクセントの法則』東京：岩波書店。
- 田中真一・窪菌晴夫 (1999)『日本語の発音教室 理論と練習』東京：くろしお出版。
- 服部四郎 (1980)「音韻論から見た国語のアクセント」柴田武他編 (1980)『日本の言語学 第2巻 音韻』364-403, 東京：大修館書店。（『国語研究』2-3号 (1954)からの再掲）
- 松森晶子 (2009)「西日本における「昇り核」の方言—鳥取県青谷町周辺のアクセント—」『第23回日本音声学会全国大会予稿集』（2009年9月27日、九州大学）199-204。
- 室山敏昭 (1982)「鳥取県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学8—中国・四国地方の方言—』175-209, 東京：国書刊行会。
- 森下喜一 (1999)『鳥取県方言辞典』鳥取：富士書店。
- 山口幸洋 (1997)「2-2 日本語諸方言のアクセント」杉藤美代子監修『日本語音声1 諸方言のアクセントとイントネーション』63-95, 東京：三省堂。
- Labrune, Laurence (2012) *The Phonology of Japanese*, Oxford: Oxford University Press.
- Vance, J. Timothy (1987) *An Introduction to Japanese Phonology*, Albany: State University of New York Press.

#### 参照ウェブサイト

「ウィキペディア 鳥取市」(<https://ja.wikipedia.org/wiki/鳥取市>) (2020年6月30日閲覧)

(公立鳥取環境大学 教授)  
kuwamoto@kankyo-u.ac.jp